OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	安部公房の<亡命文学>論 : 安部公房が語るガブリエル・ガルシア=マルケス『百年の孤独』
Author(s)	朴, 利鎮
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2011, 45, p. 119-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

安部公房の＜亡命文学＞論

──安部公房が語るガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』──

朴　　利鎮

キーワード：亡命，亡命文学，越境，ガブリエル・ガルシア＝マルケス，『百年の孤独』

1. はじめに

本稿は、安部公房の亡命者・亡命文学に対する認識を、より鮮明に浮き彫りにすることを目的とする。そのため、安部の亡命に対する意識がうかがえる「内的亡命の文学」という 1979 年のインタビューを参考にしながら、特にガルシア＝マルケスに対する彼の視点に注目する。安部の考えた亡命文学論を探るためには、彼のガルシア＝マルケスに対する独特な観点を理解しておく必要があるからである。

安部公房が求めていた文学や作家としての位置を考える際、亡命者的な視点は重要である。安部は生まれてすぐ日本をはなれて満洲で育った。そして、敗戦の後、引揚げを経た彼は、戦後日本社会の中へうまく適応することができなかった[1)]。安部が感じた戦後の日本での実存に関わる個人的な問題は、彼の創作活動にも影響を及ぼしていると考えられる。作品の性格ともなっている反共同体的な側面はもちろんのことで、絶えず国家への帰属を拒否する文学性は、現在では安部公房文学の国際性として受け取られている[2)]。そして、安部のそのような視点は、最終的に亡命文学に展開されていくといえよう。しかしながら、今までの安部に関する先行論は、彼の満洲体験に起因する故郷喪失感や反伝統的な態度を以て、「境界」に

関する認識を分析するにとどまっている[3)]。すなわち、安部の脱国家的な態度を導き出してはいるが、それが安部のどのような世界観と関わっていたかについては論じられていない。安部の作家としての位置づけや彼が目指した文学を、亡命文学の地平の上で見直すのが本論文の狙いである。

とりわけ安部はガルシア＝マルケスを取り上げて、亡命者が持つ感覚の特殊性を説明する。日本でガルシア＝マルケスと似た世界を描く大江健三郎や中上健次に比べて、安部とガルシア＝マルケスの直接的な影響関係はない[4)]。しかし、当時すでに国際的な作家と評されていた安部は、ガルシア＝マルケスに対して同時代作家としての仲間意識を強く表明していた。例えば、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』を語る安部の言葉からは、創作の手法的な面のみならず、自分が志向していた文学や文学者としての立場についても同質のものを、ガルシア＝マルケスの内に見出していたことがうかがえる。では、「内的亡命の文学」というタームでガルシア＝マルケスを評価した安部の見方は、どのような点で独自性を持っていたのであろうか、以下考察してみたい。

2. ガルシア＝マルケス『百年の孤独』をめぐる日本での評価

ガルシア＝マルケスの文学において基本として指摘されるのがフォークナーとの影響関係である。しかしながら、ガルシア＝マルケスの文学において、フォークナーの影響は『百年の孤独』だけに限られた問題ではない。中上健次は嘘の組み合わせの意識的な使い方や、登場人物が持つ偏執狂的な特徴もフォークナーから得たと語り、「フォークナー読み」という言葉を用いて、『百年の孤独』だけでなく、ガルシア＝マルケスの初期短篇でもフォークナーの影響を読み取ることが出来るとする（講演「フォークナー衝撃」『中上健次発言集成 6』第三文明社、1999 年）。フォークナーの「ヨクナパトーファ・サガ」をモデルにしてマコンドが形成されたことや、内

的独白や循環構造による手法などは、二人の影響関係を語る際、何より重要な点として挙げられることである[5)]。

また、中上健次はそのような手法がかえって現実を鮮明にすると説き、「スーパーリアリズム」や「超現実的」なものをガルシア＝マルケスの魔術的リアリズムとして定義する。フォークナーに影響された文学性とともに、魔術的リアリズムは、ガルシア＝マルケスの世界を示すもう一つの代表的なタームでもある[6)]。そして、魔術的リアリズムは「円環的な時間」の描写を特徴とする神話的構造に基づいている。

> これ（『百年の孤独』－引用者注）はマコンドという幻想の町が次第に膨張して都市になり、やがて滅んでゆく年代記であり、その建設以来、中心的な家族であったホセ・アルカディオ・ブエンディーアとその妻ウルスラを巡る一族の興亡の歴史である。総ての事件は円環的な時間のなかに生起し、幻想と現実との緊密な混交は神話的な世界を創り出してゆく[7)]。（下線は引用者、以下同一）

「円環的な時間」とは、循環する特性を持つ神話的時間の流れの上に歴史という直線的な時間が交差して反復される、螺旋的な時間構造である。それは、『百年の孤独』が作り上げる世界と関わって、独特な叙述構成として評される。例えば、現在の視点から過去のことを語ったり、過去の視点から見た未来のことを語ったりするように、語りの時間が過去から未来へ飛躍したかと思うと、たちまち元の過去に立ち戻って行くような時間の流れは螺旋状をなしている[8)]。そのため、『百年の孤独』の冒頭部である「長い歳月がすぎて銃殺隊の前に立つはめになったとき、おそらくアウレリャーノ・ブエンディーア大佐は、父親に連れられて初めて氷を見にいった、遠い昔のあの午後を思い出したにちがいない」[9)]は、円環的な特性を示す「ガルシア＝マルケスらしいもの（流れ）」[10)]としてよく指摘される

一文となっている。『百年の孤独』が世界的な普遍性を獲得できた理由としては、おそらくは円環的な時間が支配するこのような神話的構造も無関係ではあるまい。

一方、ラテンアメリカの特殊な現実が小説の書き方に及ぼした影響に重点を置いて『百年の孤独』が評されることもある。特にそのような際には、ガルシア＝マルケスのジャーナリズム的な態度が例に挙がる。作家となる前に彼が勤めていた新聞社、雑誌社での活動は、現実の描写におけるルポルタージュ的な手法や台詞の持つリアリティ、読者の積極的な読みを促す三人称視点の自作への導入などを学ぶ機会となった[11)]。その上、現実を取り上げる場合において、ラテンアメリカの歴史に対するガルシア＝マルケスの理解は、ジャーナリストとしての鋭い批判精神に起因していると言える。

> （『百年の孤独』には－引用者注）インディオの民族移動（創世神話）、植民地支配、独立戦争、革命・反乱、初期資本主義、多国籍資本主義といった全歴史がこめられている。これを、歴史学の単純時間に適応させては何もわからない。数百年のラテンアメリカの歴史が、ウルスラという典型的な太母を軸にした百年の彼女の生涯においてくりひろげられている[12)]。

すなわち、『百年の孤独』にはラテンアメリカを特殊なものとする彼等の歴史・文化が絡み合っているのである。丸谷才一はそのような歴史感覚を反ヨーロッパ的な「別の歴史観」として説明する。丸谷は、『百年の孤独』の舞台となっているマコンドという架空の世界が、ガルシア＝マルケスなりの歴史認識に基づいた空想の共同体として設定されていると見なす。その上で彼は、ヨーロッパ的な歴史把握に対立する歴史的な時間を発見する、反ヨーロッパ的な態度だと評価する[13)]。そのような視点は、ラテンアメ

リカの現実に取り組むこと自体をそのままシュールレアリスムの実践でもあるように見なすことで、ラテンアメリカの特殊な状況と文学を結びつけて考える立場と言えよう。

以上のように、『百年の孤独』の構造における神話的かつ螺旋的な時間構造、ラテンアメリカの特殊な歴史・文化、さらにフォークナーの影響は、ガルシア＝マルケスの文学を語る際の代表的なものである。では、これまで述べてきたものと比べて、安部公房のガルシア＝マルケス評価はどのような点でそれらと異なっているのであろうか。

3. 安部公房が語る内的亡命者のガルシア＝マルケス

「内的亡命の文学」の中で、＜内的亡命を続けていった魂＞としてガルシア＝マルケスを一つの指標に揚げる安部公房は、まずラテンアメリカの特殊な現実について、ラテンアメリカの作家がシュールレアリスムを体験したことは確かだろうと認める。だが、安部は「中南米に戻ってみたら、シュルレアリスムがまさに現実としてそこにあった」[14] という道筋は間違ったものであると注意を促す。

> マルケスの場合も、その主題は、やはり都市なんだよ。中南米の土俗的なものを素材として使ってはいるけど、小説の本質はやはり都市なんだ。その点を抜きにして、彼の作品に書かれている中南米の貧しい田舎で起こる出来事がシュルレアリスム的な現実だなんて思ったら、それこそ転倒もいいとこで、そんな馬鹿な話はない。一見、土着的に見えるもの、あれは方法なんだよ。（中略）小説の舞台としての状況の設定、あれは方法としてはむしろ、非常にカフカに近い。（中略）インタビューの発言のように、「祖母の語り口から学んだ」というような言い方をしたほうが、政治的なものの見方をする連中をなだめる

には好都合じゃないか[15]。

カルペンティエル（Alejo Carpentier Valmont）は「パリのシュールレアリスムがラテンアメリカの現実で成果を出すようになった」という趣旨の「驚異的現実」論を発表した。シュペングラーの『西洋の没落』のように、ヨーロッパ文明は没落期に入り、別の地域で新しい文明が隆盛するとする、新天地主義（mundonovismo）がラテンアメリカの知識人の間に広がった。こうして、ラテンアメリカのアイデンティティへの探求は、地域主義（regionalismo）、クリオヨ主義（criollismo）、アフリカ・キューバ主義（afrocubanismo）、インディオ主義（indianismo）、土着主義（indigenismo）の文学運動など、様々な傾向を胚胎する。そこにヨーロッパにいたラテンアメリカの知識人たちがスペイン内戦、第二次大戦を避け、大挙帰国してくる。そのため、ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術やシュールレアリスム精神に感化された当時の文学者や学者たちが、ラテンアメリカでそれを実践したとしても不思議ではない状況にあったことは間違いない。

ところが、安部は、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』がラテンアメリカの現実を土俗的かつ土着的に用いているのは、あくまでも方法的なものにすぎないと考えた。そして、ガルシア＝マルケスのインタビューについて言及する。そのインタビューでガルシア＝マルケスは自分の表現方法を「祖母の語り口から学んだ」と語っているが、安部はそれを言葉通りに受け取ろうとはしない。その発言の主意は、自分の創作手法に政治的なものを見出そうとしがちな批評家連に注意を促すところにあり、聞き手がキューバ人であったために、ガルシア＝マルケスなりの「政治的配慮」がはたらいていると安部は説明する[16]。

安部公房が読んだインタビューは、ガルシア＝マルケスが1970年にキューバを訪問した時のもので、それが『海』1979年2月号のガルシア＝

マルケスの小特集の際に日本語訳された。そこでガルシア＝マルケスは「ラテンアメリカの現実を、より大きな尺度で見て行くならば、驚くべき広がりを持っていることに気がつくはずだ。ぼくは疑似現実と呼べるようなものがあると思うんだ」[17]といい、自分の文学はそのような「現実の全体を扱う文学」[18]と関わっているとする。それを聞いていた聞き手が、魔術的リアリズムやその文体について質問する。

> ぼくが考えるには、『百年の孤独』があああいう風に書かれたのは、祖母があああいう風に喋ってたからだよ。どういう文体が作品に一番しっくりするだろうかと考えていたら、祖母が、それこそぞっとするような話を、すぐそこで見て来たかのように、平気な顔をして淡々と語ってくれたのを思いだした[19]。

ガルシア＝マルケスが自ら「祖母の語り口から学んだ」というように、先代から伝えられた伝承・伝説のような話を文学的に昇華して成し遂げている『百年の孤独』の文体は、ガルシア＝マルケスの文学性とも繋がっている。では、安部はこの発言をどうして政治的な見方をする連中をなだめていると判断したのだろうか。その内容を少し考えてみよう。

聞き手が『百年の孤独』に対するこれまでの批評についてガルシア＝マルケスの所見を聞くと、彼は「ぼくが一番書きたかったことについて、誰も論じてくれていない」と言い、次のように続ける。

> ぼくはもったいぶった人間を見るととり肌が立ってくるんだ。コロンビアという、世界で最ももったいぶった国で生まれたというのに、そう思うんだ。（中略）『百年の孤独』と仰々しく取り組んでいる批評家たちにそういうことを言いたかったわけだ。あの批評家たちのまじめ臭った仰々しい態度はどうも気にくわない。小説というのは、もった

> いぶった世界を壊すものであるというのに、彼らは作品を前にして、厳かにやりはじめる。それでぼくがまじめに受け取る必要がないって言ったんだ。つまり描かれた時のやり方で、作品にアプローチしてもらいたいってわけだ[20]。

「もったいぶった世界を壊す」のが小説であり、自分の小説に「もったいぶった世界」を持ち込まないでほしいというガルシア＝マルケスの話を、安部は政治的な見方をする連中をなだめる態度であったと見なした。安部のこのような見方は、『百年の孤独』に対する彼の理解が必ずしも充分だとは言えなかったことを物語るところでもある。というのは、祖母の語り口から学んだとするガルシア＝マルケスの＜語り＞は、事実とは信じがたいエピソードで満ちている『百年の孤独』が示す核心的な文学性でもあるからだ[21]。そして、その「語りの文化」[22]は、ガルシア＝マルケスの文学がラテンアメリカの民衆的、大衆的な性格を基盤にしていることを示す。

しかしながら、シュールレアリスムがラテンアメリカの現実に適うという言説や、現実が驚異的だから文学も驚異的だとする見方、あるいは現実の対象をありのままに文学に投影しているかのような見方は、当時のラテンアメリカに対するエキゾチックな発想と絡んだものである。そのため、祖母の語り口から学んだとするガルシア＝マルケスの発言を、単に土着的、口承文学的な形式と見なしてはいない安部公房には、彼独自のガルシア＝マルケス理解が見て取れる。

また、『百年の孤独』を以て、過去が単なる過去としてではなく、現在と共存し、すべての時間を同時代的なものとして捉えることができるという認識が安部にはあった。螺旋構造による神話性や民話的な要素に関して、まず安部は「総体を把握したいという人間の衝動の投影としての神話性、あるいは神話的志向というものは、ガルシア・マルケスには十分ある」[23]

とし、そのような傾向は、おそらく近代文学の中ではポーに一番あったと語る。すなわち、安部自身が挙げたカフカやポーと同じく、ガルシア＝マルケスを考える場合も、「たんに中南米の枠の中だけでなく、地球的な文学の総体の中で見ないと、十分にはとらえられない」ものであり、ガルシア＝マルケスもまた、「本当の意味での国際性」[24] を備えた作家であると考えた。このように、安部はラテンアメリカ文学の文学的土壌を汎ヨーロッパ的な流れの中で説明しようと試みる。

> 『百年の孤独』など一見ファンタステイックに見えるけれど、むしろすごく即物的だ。異様なまでに即物的だ。その即物性は、飲まず食わずでいたあげく軽くなって人が宙に浮んだり、あまりに人から黙殺されたために透明になってしまうということが、少しも矛盾しない。宙に浮くとか透明になるとかいうことは、いかに非現実的に見えても物質の現象だね。だから、マルケスはあくまでも物質の現象としてそうしたものをとらえているんで、即物的な感覚がなかったら、あの発想も出てこなかったはずだ。そこに彼の群を抜いた才能があるわけで、けっしてそれは伝承とか民話的なものではない。そのへんが誤解されると、マルケスだって単に偉大なる地方文化の貢献者にされてしまいかねない[25]。

その伝承的で民話的な要素のために、『百年の孤独』は土着性に満ち溢れた地域主義的あるいは民族主義的な文学として直ちに論じられやすい。そのような傾向に対して、神話的な志向が普遍的な人間の総体を表わす意志であり、それはポーやカフカにも共通しているとする安部は、ガルシア＝マルケスの物語性を世界的な流れの中で評価しようとしたのである。

しかし、安部公房のこのような考え方は、地域性を越えた同時代性という面にあまりにも執着しているようにも見える。ガルシア＝マルケスの場

合、ラテンアメリカの民衆的な物語の構造を取り入れて文学的に用いている[26]。しかし、安部からすればこれはラテンアメリカの特殊性からではなく、パリの亡命文学とシュールレアリスムの関係から理解すべきことだ[27]という。そして『百年の孤独』の背景や登場人物の風習、習慣などは確かにラテンアメリカ的なものかもしれないが、結局は現代というこの特殊な時代の人間関係を照射する「共同体の崩壊過程でおこる人間関係の変質と反作用」[28]を主題にしていると説く。

安部公房が語るガルシア＝マルケス『百年の孤独』は、その神話的な構成に関する特性については、他の評価と重なるところを持っているように一見思える。だが、繰り返し汎ヨーロッパ的な流れの中から説明し、カフカや亡命者の文化との関わりから接近する点など[29]は、明らかに安部の視点が持つ特徴だと言えよう。

さらに、安部は『百年の孤独』において、一族の最後の者が百年前に書かれた予言書を解読し、まさにいま自分が滅びる瞬間に立ち会うという結末に注目しながら、「完全にオリジナル」だと評する[30]。『百年の孤独』において、その冒頭部が「ガルシア＝マルケスらしいもの」だとしてよく取り上げられることは前述した。だが、安部はむしろ最後の場面にそのオリジナリティを見出す。最後の予言の解読によって一族の滅亡は明らかになると同時に、滅んでいく共同体の運命を表わすという構造は、共同体とその帰属問題を主なテーマに据える安部公房の文学観に近いと言えよう。したがって、安部が「共同体の崩壊過程でおこる人間関係の変質と反作用」を『百年の孤独』から読み取ったのは、壊れかけた共同体の残骸をみつける＜亡命者の歴史感覚＞に着目したためだと考えられる。安部の作品で描かれる異端者や国籍不明の存在の離脱的な行動や視線は、そのような感覚を内包しているわけである。安部が『百年の孤独』の中から捉えた亡命者の歴史感覚を示すものは、滅んでいく共同体の運命に注がれたガルシア＝

マルケスの視線だけではない。ある日マコンドに広がった不眠症のせいで、住人たちは自分たち自身の記憶をすっかり失う。つまり、過去と現実のすべてが断絶する。それは、現実において消え去ることが運命であるかのような、まるで異邦人のような亡命者の実存的な問題とも関わる。安部も、『燃え尽きた地図』などを通して、過去との断絶を記憶喪失の形で作品化していた。

安部公房がガルシア＝マルケスを今日性の文学として取り上げ、亡命者の意識や文化から捉えようとしたのは、ガルシア＝マルケスのような亡命者の意識と文化の中で、安部が自身の文学者としての位置を見出そうとしたからだと考えられる。「国家は国家へ帰属しないのは悪いことだということを絶えず反復する」[31] と安部が言っているように、「国家への帰属」と「これを拒否する人間」という構図は、絶えず国家からの離脱・逃走を描く、彼の最も重要なテーマでもある。このように彼の文学に貫かれている帰属の問題と、異端者や外部者、反共同体的な人物の描き方は、亡命者の文学と相通じる特性を持っていると言えよう。

4. まとめ：安部公房の＜越境＞

安部公房の「内的亡命の文学」とは、文字通りの亡命者を含め、作家自身が抱く亡命者としての意識を強調するものであったと言うことができよう。安部の満洲体験が安部を日本の批評空間から解放し、自由な活動を可能にしたと評価する島田雅彦は、安部公房の文学を「移民文学」の領域で論じ得る[32] とする。しかしながら、そもそも、亡命の概念は政治的・社会的・地理的な判断の基準の上には成り立つが、文学にとって本質的な基準にはなりえない。そのため、今まで亡命は「過激な価値観の転倒の過程」[33] による政治的な行動としてしか認められなかった。『亡命文学論』（作品社、2002 年）を書いた沼野充義は、亡命は＜国籍を失くす＞ことだが、現在

の意味において亡命者は＜異文化の媒介者＞になると、亡命を文化的な側面において扱う。一方、川村湊は、亡命者は母語としての言葉を失うことで、＜日本語に異和を持ち続ける言語による亡命＞が日本における亡命文学の一つのあり方だと言う[34]。このように、日本文学においては亡命・亡命者の文学に対する概念がまだ抽象的なものである。だが、亡命を手法として使うことはできよう。沼野充義や川村湊は、島田雅彦が、反日本人を標榜する人物を作り上げ、その人物達に「ヒコクミン」の称号を与えて、日本語文学における人工的亡命文学を創造する可能性を探り、国の文学的な閉鎖性を打破しようとしたことを、亡命性が持つ文学的な有効性として認めている。

安部公房も文字通りの亡命者とは言えない。「満洲での生活は敗戦で他律的に放棄させられたわけです。こんどは自律的に放棄した」と語る安部は、亡命者より「故国放棄者」[35]に近いかもしれない。実際に国境を越えることはないが、絶えず日本と言う国境を相対化しようとする態度は、自ら故国を捨てるような行動意識である。さらに、安部が言う異端的な存在は、違和感をもたらすと同時に日常的なものを異化する。そのような異化を指して亡命者、異邦人、周縁の人、ヒコクミンなど、それを指し示す言葉はいくらでもあるが、異端者の視点を持つこの位置が、国や民族の意識の枠を崩す力を内包することに変わりはない。安部公房の文学において、逃走や離脱という行動力に支えられているこのような特徴を＜亡命性＞と言うことができよう。自身の文学性と重なっている点に着目しながら、世界文学の新たな流れの指標としてガルシア＝マルケスを位置づけたのは、安部自身が自らの文学者的な位相を明確にする行為でもあったのである。

安部公房の境界に対する認識は、彼の思想や文学の特色を示しており、作品の時空間的な特徴と共によく引用される。絶えず変化しつつ、社会に定着することへの拒否を暗示する彼の認識の方向は、あらゆる空間に境界

線を見出そうとする安部の現実感覚に繋がる。そのような現実感覚が反共同体的なものを志向する彼の文学的な空間性と関わって、『終りし道の標べに』の満洲、『榎本武揚』の蝦夷、『砂の女』の砂の村など、社会のルールが通用しない空間として表われている。安部公房の文学は、そのように「国籍の廃絶。破滅と再生、破壊と創造、支配と被支配がくり返されるプラスチックなる都市」[36] 的なものを用いて、国家や共同体からの逃走を描く。さらに、自分のアイデンティティにこだわる実存的な思考が、境界者のような存在感を持つ異端の雰囲気を漂わせるようになる。それゆえ、安部公房の文学には国家の境である国境だけではなく、民族的かつ文化的な境界を越えていくという意味の、いわゆるボーダーレス的性格が内在している。それは、安部の文学が体現する世界が亡命文学という領域で再評価しうる手掛かりを示していると言えよう。[37]

※本論文執筆にあたり、日本語の表現と出典の確認について多大な恩恵を受けた博士課程院生の小橋玲治氏に感謝の意を表する。

注

1）日本に引揚してきた安部公房は酷い生活苦をなめた。それは生活基盤としての地を失ったためでもあったが、精神的に落伍者や脱落者同様の存在危機を抱いた。このような危機意識が彼のアイデンティティの混乱をもたらしたことは、彼の初期作品によく反映されている。また、安部が埴谷雄高に送った書簡にもそのような悩みがよく書かれている。（「埴谷雄高宛書簡　第 1 信―第 15 信」『安部公房全集 030』、新潮社、2009、参照）

2）ヨーロッパ日本学会の会長だったオロフ・G・リディンは、満洲から逃亡して日本で過ごすしかなかった安部の経歴に注意を払い、安部の引揚者の立場を亡命者に近いと説明している。（織田智恵訳「安部公房の国際主義」『新潮』1988. 3、154-161 頁）。

3）安部公房の境界認識に関しては次のような先行論がある。紅野敏郎「安部公房の批評の構造」、渡辺広士「安部公房と共同体」、柾谷悠「内なる辺境」、

栗坪良樹「けものたちは故郷をめざす」(以上 4 点『国文学 解釈と教材の研究』17 巻 9 月臨時増刊号、1972. 9)、ジボー・マーク「荒野上の存在―安部公房における境界とアイデンティティー」(『比較文化論叢』8、2001. 9)、沼野充義「世界の中の安部公房」(『国文学 解釈と教材の研究』42 巻 9 月号、1997. 8)、鳥羽耕史「国境の思考」(『文芸と批評』8、1997. 5)、磯田光一「無国籍者の視点―安部公房論」(『文学界』20-5 号、1966. 5)

4) 日本におけるガルシア＝マルケスの紹介は、『百年の孤独』(1967 年) に対する欧米での評判が報じられた (『朝日新聞』1970 年 11 月 19 日) のを嚆矢とする。『百年の孤独』はその後、1972 年 1 月に鼓直による翻訳が刊行された (『現代世界の文学』新潮社)。

5) 花方寿行「ガルシア＝マルケスにおけるウィリアム・フォークナーの影響」『比較文学研究』東大比較文学会 67、1995 年 10 月、110 頁。

6) 中上健次、野谷文昭「南の熱い文学―大いなる母とマチョの世界」『ユリイカ』1988 年 8 月、148 頁。

7) 辻井喬「深夜の読書」『辻井喬コレクション 8』河出書房新社、2004 年、187 頁。

8) 木町榮一「円環と直線」『ユリイカ』1988 年 8 月、183 頁。

9) ガルシア＝マルケス『百年の孤独』鼓直訳、新潮社、1972 年、5 頁。

10) 桜庭一樹、野谷文昭、柴田元幸、沼野充義「『百年の孤独』を超えて」『すばる』2008 年 12 月、278 頁。

11) 野谷文昭「「現実」との結び目」『ユリイカ』1988 年 8 月、169 頁。

12) 山本哲士「マコンドを消し去った《風》のレアリダード」『カリブの龍巻―G・ガルシア＝マルケスの研究読本』北宋社、1984 年、3 頁。

13) 丸谷才一「晴れやかでしかも暗澹たる華麗な悪夢」『週刊朝日』1982 年 11 月 12 日号。

14) 安部公房「内的亡命の文学」『安部公房全集 026』新潮社、2002 年、379 頁。

15) 同 379 頁。

16) 同 379 頁。

17) ガルシア＝マルケス「二百年の孤独へ」杉山晃訳、『海』1979 年 2 月、304 頁。

18) ガルシア＝マルケス「二百年の孤独へ」304 頁。

19) 同 305 頁。

20) 同 305 頁。

21) 落合一泰「ラテンアメリカのモニュメント、モニュメントとしてのラテンアメリカ」『現代思想』vol.16-10、臨時増刊総特集、1988 年 8 月、14 頁。

22) 前掲落合論文、12-15 頁。

23）安部公房「内的亡命の文学」389 頁。
24）同 389 頁。
25）同 390 頁。
26）中上健次、野谷文昭「南の熱い文学―大いなる母とマチョの世界」（『ユリイカ』1988. 8. 特集ガルシア＝マルケス）、山本哲士「マコンドを消し去った《風》のレアリダード」（『カリブの龍巻―G・ガルシア＝マルケスの研究読本』北宋社、1984. 10）など。
27）安部公房「永遠のカフカ」『安部公房全集 027』新潮社、2000 年、76 頁。初出は、第 162 回新潮社文化講演会、1980 年 12 月 5 日。
28）安部公房「地球儀に住むガルシア・マルケス」『安部公房全集 027』新潮社、2000 年、125 頁。
29）「僕はマルケスを読んで、改めて一つの時代を照射した力としてのカフカを感じた。もちろん、カフカとマルケスは、ひどく異質な世界に属する作家だけど、置かれた状況、さっき言った内的亡命という状況と、方法において、きわめて近い作家だと思う。」前掲「内的亡命の文学」『安部公房全集 026』387 頁。
30）安部公房「内的亡命の文学」392 頁。
31）安部公房「書斎にたずねて」『安部公房全集 024』新潮社、1999 年、145 頁。
32）リービ英雄・島田雅彦対談「幻郷の満州」『ユリイカ』26-8、1994 年 8 月、72-84 頁。
33）沼野充義「流謫の言葉」『亡命文学論』作品社、2002 年、18 頁。
34）川村湊「日本語文学における「亡命」とは何か―島田雅彦の閉鎖的側面について―」『モダンほら公爵の肖像―島田雅彦の研究読本』北宋社、1986 年、163-169 頁。
35）エドワード・W・サイード『故国喪失についての省察 1』大橋洋一他共訳、みすず書房、2006 年、185-186 頁。
36）栗坪良樹「安部公房・＜砂漠＞の思想―その倫理と世界性について」『国文学 解釈と教材の研究』42 巻 9 月号、1997 年 8 月、113 頁。
37）本論文執筆に際して、安部の『百年の孤独』理解の妥当性の検証及び「内的亡命」という言葉に対する安部自身の定義の説明が不十分であるというご指摘を清水康次教授より受けた。それらの点に関して、本稿で十分に解説するには至らなかった。今後の課題として、他日改めてそれらの問題に取り組みたい。

（大学院博士後期課程修了）

요기

아베 코보의 <망명문학>론
──가브리엘 가르시아 마르케스 『백년의 고독』에 대한 논의를 중심으로

박 이진

본고는 아베 코보의 망명자, 망명문학에 대한 인식을 고찰한 것으로, 그의「내적 망명의 문학 (内的亡命の文学)」(1979년) 에 나타난 가르시아 마르케스에 관한 담론에 주목하였다.

아베는 가르시아 마르케스를 중심으로 망명자가 갖는 감각의 특수성을 설명한다. 그리고『백년의 고독』이 망명문학으로서의 세계를 그리고 있다고 평하였다. 이러한 시점은 일본에서 통용되고 있는 가르시아 마르케스에 대한 평가와는 다른 아베 코보만의 독특한 이해방식이라고 할 수 있다. 특히 포크너의 영향과 저널리스트로서의 경험이『백년의 고독』창작에 큰 영향을 미쳤다는 제론들과 다르게 아베는 가르시아 마르케스를 카프카에 가깝다고 이해하며 즉물적이고 신화적인 창작방식을 망명자가 갖는 역사관에 비추어 논한다. 이러한 창작방식이 바로 아베 코보 문학이 갖는 문학세계와 상통해 있는 것은 말할 필요도 없다.

즉, 아베는 가르시아 마르케스의 문학성을 자신의 문학세계에 비추어 평가하면서 망명문학이라는 새로운 세계문학적 지평에 자신을 포함시키고자 한 의도를 엿볼 수 있다.